



日本で最初の自動洗卵機を開発 共和機械株式会社 (河面)

鶏卵産業用の機械を製造する共和機械は、昭和34(1959)年に日本初の自動洗卵機を開発した会社です。国内外の顧客に向き合い、独自の技術開発を続けています。その秘訣を、代表取締役社長の友末琢磨さんに聞きました。

家業を助けるために発明した卵の洗浄機 顧客の要望に応え、技術革新を遂げ世界へ

創業のきっかけ

当時14歳だった父が、家業を手伝うために卵の洗浄器を発案しました。大手新聞社が主催する「学生児童発明工夫展」に出展したところ、総理大臣賞を受賞し、全国の養鶏農家から問い合わせを受けるようになりました。

この反響を受け、

技術研究が得意だった祖父が、日本で最初の自動洗卵機(写真下)を開発し、会社を立ち上げました。



技術開発を続けて60年

会社の立ち上げが、国内の養鶏経営の多くが規模を拡大した時期と重なり、追い風となりました。卵をきれいにするだけでなく、大きさによる選別を自動で行う装置、高い精度でひび割れや中身を検査する装置など、時代に合う技術開発を続けました。導入後の点検や顧客からの問い合わせ、相談に応じる体制を整えました。会社が続けているのは、顧客からの要望に応え続けてきたからだと思えます。

海外へ進出

日本は、卵の消費量が世界第二位で、生卵を食べるという独自の文化があります。このため、海外の国々とは違う視点で技術開発を求められてきました。このような環境で培った技術を打ち出し、海外21カ国に進出しています。

卵への思い

卵は、食物繊維とビタミンCを除いたすべての栄養素を含む、完全栄養食品といわれます。卵の素晴らしいさを学ばなければという思いから、日本卵業協会が主催する卵のソムリエ検定(タマリエ)の取得を社員に勧めています。卵への知識を深めることで、生産者の要望に寄り添い続ける会社を目指しています。



衛生面を追求した最新の洗卵選別包装システム



トライフープ岡山の開幕戦を取材しました。プロスポーツの撮影はもちろん、生での観戦も初めて。場内の実況や音楽、撮影場所のゴール裏で見る激しい攻防に心が躍りました。夢中で撮影していると、あっという間に試合終了。次はファイナル越しでなく、観客としてじっくり試合を楽しみたいです。(☆)

21ページで紹介した牛の作品。どこかで見た記憶がありませんか？ 昨年の11月号「つやま和牛」の表紙を元にした貼り絵だそうです。締め切りに追われ発行すると振り返る時間がない紙面との思わぬ再会。題材に取り上げてもらえた喜びに加え、楽しかった取材を思い出し、温かい気持ちになりました。(♡)

生の卵を食べる日本人を見て、海外の人が驚くことを知っていますか？ 生で食べる国は、日本と一部の国だけだそうです。このため日本の卵は、品質管理が徹底し「衛生管理は世界一」といわれています。この卵の品質を支えている、市内の会社を取材しました。詳しくは「津山自慢」の記事をご覧ください。(三)